
証明

ポテトバサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

証明

【Zマーク】

N43350

【作者名】

ポテトバサー

【あらすじ】

皆わんを証明するものはなんですか？

短編小説九作目です。

役所は大忙しだった。

「次の方どうぞ・・・」

その次の方は不安げな顔をしながら受付のイスに腰を下ろした。

「えー、証明書の手續ですね・・・ではこちらに記入していただけますか?」

不安げな男は、丁寧に文章を読み、丁寧に記入していった。

「はい、ありがとうございます。では、いま確認をしますのであちらの席でお待ちになつてください」

不安げな男は促されるまま、「あちらの席」に腰を下ろした。落ち着かない男は辺りを見回した。役所には様々な人達がいた。新しい生活の為の手續をしている者。どうみても何かあった様子の者。大人しく絵本を読む子供に、親からも注意されることなく走り回っている子供。その光景は男の不安げな気持ちをいくらか和らげた。

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

役所の男は、不安が少し和らいだ男を部屋へと案内した。

「どうぞいらっしゃる。中の面接官に、このカードを渡してください」

役所の男は「説明足らず」で男の和らいだ不安を元に戻した。

「は、はい。わかりました」

不安げな男はその部屋に入った。部屋には一つの机、その机をはさみ、向かい合わせるように二つのイスが置かれていた。そして、片方のイスには面接官らしき男が座つており、机の上には見たことも無い機械とモニターが置かれていた。不安げな男は取調室にきたような感覚だった。

「どうぞいらっしゃへ」

座っていた面接官は立ち上がり、空いているほうのイスに手を差し出しながら言つた。

「あ・・・はい、失礼します」

「それで・・・ですね。えー、係りの者からカードを渡されたと思うのですが・・・」

「えつと・・・これですか?」

不安げな男はカードを渡した。

「はい、ありがとうございます」

面接官はカードを受け取ると、机の上の機械に差し込んだ。そして何度もモニターをタッチした。

「ええーとですね、いま機械のほうでデータを処理をしていますので、その間に簡単な質問をさせていただきます」

「はい・・・」

「それでは・・・」

面接官はファイルの中から書類を取り出し、めぐりだした。

「最近、何か嬉しかったことはありましたか?」

「嬉しかったことですか・・・」

「はい」

「小さいことでもいいですか?」

「ええ、構いません」

「あの・・・」の間、自動販売機で飲み物を買つたんですが、そのとき当たりが出まして・・・」

不安げな男はあまりにも小さことなので、話し方に恥ずかしさがあつた。

「そう・・・ですか。なかなか出ないですもんね、当たりつて・・・」

面接官の話し方には少し戸惑いがあつた。

「それでは・・・、最近してしまつた悪いことはありますか? 正直にお答え下さい」

「わ、悪いことですか？　えー・・・」

不安げな男は考えた。ところよりも記憶の引き出しを必死に探し
た。

「なければないでいいんですが・・・」

「あー。」

不安げな男は探し当てた。

「「」の間、飲食店の支払いのとき」・・・」

「お釣りを多くもらひてしまつたのに黙つていたと？」

「えつ？あ・・・いえ・・・」

面接官は慌てられなかつた。

「その・・・支払いのときにですね、ポイントカードに入れてもら
つたポイントが3ポイント多かったんですが、それが言えなくて・・

・」

「ああ・・・ポイントですか・・・」

面接官はその後、一一つの質問をした。その間に機械は自分の
仕事を終えた。

「あー、ちゅうじゅう結果が出たようですね」

面接官は機械からの報告書を受け取った。

「……えー問題店は見つからなかつたよつです」

「は、本当ですかー」

不安げな男は、不安げではない男になつてこた。

「ええ、本當ですか。おめでとうござります。」おひがは証明書の……

「

ゾンビ……

面接官の声をたゞぎつたのは隣りの部屋からの音だった。

「ゾンビれあ、早くしてくんねえかなー!？」

マナーやモラルとは無縁の男が大きな声を立てた。

「あ、あのですなーーー早くこよつても質問に答えていただかない
と……」

「質問質問つるせんでんだけよーーーんもん、つまごめんめえが
書こことやこいだのーーー。」

「で、ではーつだけお答えになつてもいいたら、あぐ終わらせます
のでーーー。」

「だから早くじゅつとこいんだよーーー。」

「面接官は恐々していたが内心は違つた。

「最近してしまつた、悪い」とは・・・」

「んなもんねえよー ちつー いいから早く証明のやつよ!せよー。」

その間に機械は自分の仕事を終えた。

「あ、ちよつど結果が出たよ!です・・・」

面接官は機械からの報告書を受け取つた。そして、面接官は内心のものを表に出した。

「証明書のほうはお渡しする」とが出来ません

その言葉をきつかけに、相手に喋らせないよ!早く口調で喋り続けた。

「この報告書を見てください。ほとんどの項目にチェックマークがついています。三つ以下なら証明書の手続を行えるのですが、それ以上は矯正収容所に送られることになります。あなたの報告書の結果ですと、すぐに送られる」とになるので・・・こちら・・・」

「どにあつたのか、机の下から大きな紙袋を取り出し机の上に置いた。中には分厚い教材がぎつしりと詰まつていた。面接官の話を聞いているうちに、マナーとモラルとは無縁の男は「不安げな男」になつていつた。

「これは矯正収容所で使用する教材です。収容所で行われる第一試

験に五回以内に合格しないと、第一試験を受けることになります。その第二試験に同じく五回以内に合格しないと極刑に処されるので注意してください。また、合格して外に出られても十年間は局の監視下におかれます。定期的に出される報告書の内容によつては再収容となります。当然、違法行為などをしてしまつたときも再収容となります

面接官は話を終えると、機械についているスイッチを押した。するとすぐにドアが開き、収容所の所員だろうか一人の大男が入ってきた。

「お願ひします」

「わかりました」

叫び暴れる「不安げな男は一人の大男に連れて行かれた。

「フツ・・・、馬鹿な男だ。眞面目に生きていればいいものを・・・」

「

面接官は一人でニヤニヤしていた。

「アソツの極刑はまず間違いない。あんな奴、生きていても何の価値もない。本当に馬鹿な奴だ!!」

その様子をモニターで見ていた役所の所長は部下に言った。

「あの面接官も収容所へ連れて行け！ 人が死ぬのを喜んでいるとは何て奴だ！！」

今日も役所は大忙しだった。受付は言つた。

「善人証明書の手續はあちらになります」

(後書き)

自分自身を本当に理解できるものって何でしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4335o/>

証明

2010年11月29日23時44分発行